慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代日本における社会成層研究の生成
Sub Title	The creative studies of social stratification in modern Japan
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.5 (1977. 5) ,p.1- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770515-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本における社会成層研究の生成

川合隆男

一、はじめに—社会問題への対応と「近代」社会科学の土着化の可能性—
二、貧困の近代的再編と階級論
三、社会的勢力論の試み
四、小家族化と社会生活の不安
五、郷土生活研究と「心意現象」論
六、むすび

一、はじめに—社会問題への対応と「近代」社会科学の土着化の可能性—

本論の課題は、特に近代日本において社会成層研究がどのように展開してきたのかを跡づけることである。(1) 人間の社会行為とそれに基づく社会的諸関係を解明しようとする社会学、そして、人間社会における不平等構造化と人々の生活の営みを明らかにしようとする社会成層論も、他の思想的営為や学問研究と同じように、歴史的社会的文化的背景とそれら諸条件の

もとでの具体的な人々によつて担われるのであり、近代日本におけるそれらの生成及びそれらの特徴は、根強く外国、特に欧米の輸入（紹介）科学的性格として位置づけられるところが大であつたが、その輸入的性格は単にそのままの直線的なものではなく、自国の諸条件―特に政治経済的及び社会心理的諸条件と研究実践集団の特徴に深く根ざし屈折していく、と考える。

より具体的にいえば(i)後期封建社会下（在来社会下）での社会観と草創的に芽生え蓄えられてきた土着的科学思想（土着文化）と、(ii)近代社会への模索と新たな構造原理としての天皇国家体制化と資本主義化の急傾斜、及びそこにおける社会問題の続出、(iii)外国文化の影響、欧米列強からの「近代」科学の輸入紹介作業とそれを支える研究実践集団、知識人、社会層という三つの動きの中で、日本においてもプリズムの如く屈折しつつ近代の社会科学が成立してくるのである。すなわち、外国文化の影響という外からのこれまでと異なる力と視角を採用してこれまでのイメージを残像させつつも多分に封建思想を否定して、土着的科学思想を再解釈し、変化しつつある歴史的社会的状況がとらえ直されることによつて、近代的な科学活動が定着し連続していく。

だから、これら三者の動きとの間の相互の緊張関係が乏しく、あるいは断ち切れた状態は、学問的な営みとしては、停滞状態を意味する。ここでは、近代日本において特に大正期に至つてこれら三者の相互的な緊張関係の中から、社会成層研究が新たな歴史状況を前にし、単なる輸入紹介作業を抜け出し、土着的科学思想を再解釈しようとして新たに動き出す基本的な視点を跡づけてみたい。従つて、本論では(iii)の単なる輸入紹介作業からの脱出・離脱過程を捉えることを中心に進めることになろう。新たな歴史状況を前に、在来の土着的社会観、民俗科学を否定しつつも革新的にそれらを再解釈・接合することによつてのみ、単なる輸入科学の域を脱け出し、定着・土着化されるというフィード・バックが繰り広げられていく、と考えるならば、幕末や明治前半期とは異なる特に大正期において、この(iii)の動き―外国文化の影響、「近代」科学の輸入紹

介作業とそれを支えた研究実践集団、知識人、社会層（主に新中間層）の動きを検討していくことは大切な課題となる。研究実践集団及び知識人・新中間層という諸層によつて「近代」科学がどのように土着化され、どれ程深め広げられてきたのであろうか、しばしば指摘されがちなように外国での研究動向（A→B→C→D→E……）を単に衣装を変えて我国での研究動向（A′→B′→C′→D′→E′……）を今日に至るまで繰り返してきたのであろうか。先の(i)と(ii)の動きについての課題は、別の論稿を用意している。

かつて、C・H・ページがアメリカ社会史上根本的な社会変動を経験した一八六五年から今世紀二〇年代初めまでの間のアメリカ社会学の学祖達といわれるL・F・ウード、W・G・サムナー、A・W・スモール、F・H・ギィデンズ、C・H・クーリー、E・A・ロスについて彼らの階級理論に焦点をあてて研究し、[2] 第二次大戦後M・M・ゴードンが『アメリカ社会学における社会階級論』[3]を著したように、またH・ホッジスがアメリカ文学の中でアメリカの階級を問い、[4] 一九七〇年代に入つてJ・ピーズ等がアメリカの成層研究におけるイデオロギー上の動向を検討したように、[5] 更にヨーロッパでのR・ダーレンドルフの『産業社会における階級および階級闘争』、最近のA・ギデンスの『資本主義と近代社会理論』、同『先進社会の階級構造』の例のように、[6] 過去の研究動向を再考察することによつて、将来への新たな研究のあり方を模索していたのは興味深い。わが国の社会学界においても、従来の研究動向に加えて、あるいはそれらを批判して、社会行為の主体的側面の研究、個々の日常生活や民俗、そして社会問題、実践運動への関心、批判的・創造的社会学、マルクス及びマルクス主義の再検討等に向けられつつあるのは、現代社会における人間の受動化、没歴史化によつて人間主体や人間、社会の実態、社会現象の研究が軽視されていくことに対する反省と批判によるものと考えられるが、最近になつて我が国の社会学史への関心も強められようとしているのは意義深い。[7]

だが、現在のところ我が国の社会学史の再考察は、過去に幾度か試みられそれぞれに新たな動向をつくり出していつたよ

うに、[8]漸く始められたばかりである。近代日本の不平等構造をめぐる個別の問題領域（階級・階層論、社会成層論）についての、個別科学に専門分化せずにその社会科学的な学史の再検討はむしろ今後の課題であるともいえる。その意味では、本論は荒つぽい試論にとどまるものでしかない。

日本においても、社会成層研究は、明治二〇年代から大正中期頃迄にかけて大きく顕在化してきた社会問題（social strains and social problems）への関心から萌芽的に展開された。社会的諸制度は、人々の生理的・社会文化的な基本的欲求充足を保障し、標準化し、社会秩序を形成し、しばしば半ば強制を伴いながら、方向づけるという機能（「緊張処理体系」）を果すものであるが、歴史の大きな転換状況においては、そうした機能を果し得なくなり、さまざまの「古い」、「新しい」問題状況をつくり出すことになる。こうした制度的状況の変化は、確かに巨視的、すう勢的な見方をすれば、社会と人々の一般的な「適応能力の増大」（The upgrading of adaptive capacity）、また着実に人々の自我の生成、自立と連帯、生活改善の動き等を進めてきたといえるかもしれない。しかし、急激で、しかも強制的な状況変化、制度間のひずみは、多くの人々に一般的に広く、またしばしば特定の人々には不平等的に（差別的に）、貧困、過酷な労働、疾病、精神的苦痛などにみるようなさまざまの緊張を強いることになり、社会問題として顕在化させる。社会問題発生のより具体的要因は、(i)人間労働の変化、(ii)価値葛藤、(iii)文化的遅帯（副次的文化間の不適応―例えば物質文化の変化に対する適応文化＝社会組織、価値、規範の不適応）等に求められる。近代日本のこれらの社会問題は、封建社会体制の解体、開国、富国強兵、殖産興業、国権強化などの（政治）社会革命や産業化を中心とした近代社会への制度的状況（人口・親族・経済・政治・軍事・成層・文化）の諸変化のもとで引き起された。明治以降の急激な変動は、総じて、㈠西欧からの「落差」と圧力を強く意識し西欧モデルの導入を積極的に推進しようとしたこと、㈡近代国家の建設過程にみる非連続性（伝統的土着文化との非連続）、権威主義、事大主義を強調させる傾向になつたこと、更に㈢、中央官僚やエリートによる技術主義を導き易かつた、という特徴を生み出すことになつた。

日本の産業化を考える場合に一七・一八世紀および一九世紀前半の後期封建社会下における独立国、中央集権化、経済社会化、教育の発達、社会移動等の下地的要素を充分評価しなければならないが、特に明治以降の近代日本の産業化が列強に対する富国強兵、殖産興業という形で「落差」を縮小すべく藩閥（軍閥）政府の誘導による急激で強制的な産業化が推進され、今日まで独特の特徴をになつてきたといえるだろう。他の機会に検討したように、[9] 産業化の第一段階、第二段階、第三段階によつてその社会に及ぼす諸影響は異ならざるを得ないが、ほぼ一九五〇年代前半までのわが国の産業化の第一段階においては、まず明治後半から大正期にかけて経済・産業領域を中心にその急激で強制的な産業化は生業や在来産業の没落、手職人・職人の生活破壊、農村生活の変化と疲弊、熟練と非熟練の技術格差、機械制大工業の出現、第二次産業労働化、経済規模・財政規模の拡大、労働運動の抬頭と激化等をひき起した。更に階級社会化の動きの中で行政、教育制度や軍事・徴兵制度、宗教制度の変化・整備にみる特徴も重要である。

こうした動向の中で、産業化の進展、大正デモクラシーの台頭、科学思想の発達、生活様式の変化と共に、社会運動もまた新たな黎明期を迎えつつあつた。日清・日露の両戦争、特に第一次世界大戦を通じて日本の資本主義経済は急速な発展を示し、階級構成も大きく変化しつつあり労働者の著しい増加を促した。こうして、明治期後半から大正期前半にかけて日本資本主義経済の基礎は確立されていつた。

身分社会から階級社会への移行の特徴が近代日本の社会科学者達、特に社会学者達によつてどのように把握されていつたのか、ということがここでの大きな課題となる。「官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心を倦まざらしめんことを要す」という明治元年の五ヶ条誓文の中の一ヶ条に示された如く、封建身分としての士・農・工・商の身分制廃止を法制的に明らかにし（明治二年）、明治四年には賤民の穢多、非人の称を廃止したが、天皇制を中心とした皇族、華族、士族、平民の制をとることによつて身分的再編が試みられた。民権よりも国権の強化を推し進めた過程で特に最上層、上層と最下層では身分

制的性格を色濃く残存させ再編されたことも見落されてならない。しかしながら、大正期、昭和期に入ると士族・平民層の変化によつて階級社会的性格を強め、特に産業化の展開過程のうちに身分社会から階級社会への構成変化が、促されてきたことは明らかである。

労働力の雇用化は明治一〇年代初期（一八八〇年）の四～五％から、大正九年（一九二〇年）には三〇％台と進み、明治期における①若い女性労働力、②都市下層の雑業層と農村からの出稼、③親方―子方関係による労働組といつた主たる労働力構成が、技術変化、資本主義経済の確立過程の中で特に大企業においてより熟練した専門の、しかも安定した労働力の必要性、社内（企業内）教育と学校教育制度の定着によつて、終身雇用制や年功序列制が生成し定着していき労働力構成の再編成が展開しつつあつた。明治末期ですら、労働者の賃金における工場規格差は小さなものであつたのが大正期に入るにつれて、次第にその格差が開き初めた。(i)特に大企業における男子を中心とした職員・工員・臨時工の身分差、終身雇用制、年功序列制、(ii)下請・中小企業の業主と従業員、(iii)零細企業の業主と家族従業員、(iv)出稼労働者のように、労働市場、賃金、雇用条件、技術、組合運動等をめぐつて三重ないし四重の産業労働組織が構造化されていつたといえる。更に財政規模の著しい拡大、財閥形成、米騒動にみたような生活難、労働争議・小作争議の多発と拡大、生活様式・風俗の変化等をもたらした。

農村、農民は明治初期の士農工商の身分制廃止、農民土地所有の許可、農民田畑勝手作の許可、地所永代売買解禁、農民職業の選択自由、地租改正等の体制転換的な諸政策によつて、産業化、資本主義経済及び近代国家の形成過程においてその財政、労働力の給源として極めて重要な役割をになつたが、それらを通じて土地所有の集中化と農民の零細化が急速におし進められ資本主義経済機構の中に組み込まれていつた。また徴兵制にみるように軍事、地方自治、官僚行政、宗教・教育等においても全国的な中央集権的な機構に統合されていつた。

明治末期から大正期において展開した資本、中央集権、都市、官僚等によつて推し進められた社会構造の構造変化の帰結は、明治期とは異なる近代日本における新たな状況をつくりつつあつたといわなければならないだろう。

そして、こうした近代国家と近代社会の建設という制度的状況の変革は民衆の諸生活と意欲をも揺り動かし、変化せしめつつ、新たな胎動を生み出しつつあつた。社会運動の頻発と暴発の段階から次第に個々の労働運動や友愛会創立（一九一二年）の動きや足尾鉱毒事件にみるような労働・社会運動が激化し組織化していく動向も注目される。また、明治末期にかけてあらわれた文学の側からの自然主義や写生短歌の屈折にも新たな動きを捉えることが出来る。

文学――かの自然主義運動の前半、彼らの「真実」の発見と承認とが、「批評」としての刺戟をもつていた時期が過ぎて以来、ようやくただの記述、ただの説話に傾いてきている文学も、かくてまたその眠れる精神が目を覚まして来るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、その時、「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に没頭していては時代を批評することが出来ない。(10)

かくのごとき時代閉塞の現状において、我々のうち最も急進的な人たちが、いかなる方向にその「自己」を主張しているかはすでに読者の知るごとくである。実に彼らは、抑えても抑えきれぬ自己そのものの圧迫に堪えかねて、彼らの入れられている箱の最も板の薄いところ、もしくは空隙（現代社会組織の欠陥）に向つて全く盲目的に突進している。今日の小説や詩や歌のほとんどすべてが女郎買い、淫売買い、ないし野合、姦通の記録であるのは決して、偶然ではない。(11)

我々は一斉に起つてまずこの時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察―我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。(12)

しかし、その後の状況は石川啄木が「時代閉塞の現状」（明治四三年）でえぐり出した程、閉塞状況を突き進んでいつたと

はいえないが、「古い社会問題」と「新しい社会問題」が初期的に微妙に交差しつつ社会問題に対する関心が新たな段階を迎えていたといえるだろう。いわば、大正期に至つて、社会の構造的変化に伴う「古い社会問題」と「新しい社会問題」とが交錯する問題状況に立たされて、漸く、それらの問題を捉え、解決していくことが可能であるという屈折しつつも新たな意欲と「もの」の見方、社会運動と実践運動が多様に展開されつつあつたといえる。

社会問題としての萌芽期においては、貧困問題、労働、失業、階級問題、社会運動等を中心とした社会的課題に対して官僚、ジャーナリスト、学者、運動家などのさまざまの領域の人々が、いわば未分化状態で取り組んでいたわけであるが、明治の後半期に顕在化してくる社会問題の実態についての観察と告発が、『福陵新報』、『東雲新聞』、雑誌『日本人』による高島炭坑問題についての報道、批判キャンペーン(13)（明治二〇年代）、『郵便報知新聞』（明治二三年）、松本英子の足尾鉱毒地のルポ（「東京毎日新聞」、松本英子編『鉱毒地の惨情』明治三五年）、松原岩五郎の「最暗黒の東京」（「国民新聞」明治二五年）、横山源之助『日本之下層社会』（明治三二年）、荒畑寒村『谷中村滅亡史』（明治四〇年）等のように、民間ジャーナリスト、在野の運動家によつて主になされたことは注目されなければならない。そして、大正期になると分化しつつ専門的に研究されていくことになる。日本の近代資本主義と近代国家の形成、近代化過程における社会問題の出現、大正デモクラシー、この期の比較的自由な学問の発達、ロシア革命、植民地における独立運動等の影響のもとで官庁役所の行政、大学や民間の研究者、運動家、共に全体として社会問題を客観的・学問的に、しかも政策的にとらえていこうとする機運が盛り上がり、その取り組み方が次第に組織化されていつたといえる。日本の社会科学自体が、実態の告発、観察・記述と他方の紹介導入の段階から一歩進んで、より実証的、理論的な段階へと科学の自立化と制度化の方向へと歩み出していたといえるだろう。もちろん、これは日本の社会科学の発達という巨視的な位置づけにもとづくものであり、社会学の動向に限つてみても、大正期に入つて逆に極めて講壇的な性格が濃厚になりつつあつた。また民間においても、柳田国男がロンドンで関東大震災の報に際して経

験したある議員の「是は全く神の罰だ。あんまり近頃の人間が軽佻浮薄に流れているからだ」という言動に、彼が「本所深川あたりの狭苦しい町裏に住んで、被服廠に遁げ込んで一命を助かろうとした者の大部分は、寧ろ平生から放縦な生活を為し得なかつた人々では無いか。彼等が他の碌でも無い市民に代つて、この惨酷なる制裁を受けなければならぬ理由はどこに在るかと詰問し」、「誠に苦々しいことだと思ふ」[14]と無知蒙昧をなげいているのである。そして、「即ち以前の型のきまつた時代の通りに、一隅を押えて他の部分を推し量り、大体の誤無き見当を立てるということが、今日は非常に六つかしくなつて居るからである。学問殊に最も精確なる学問が、急に御互いの生存の為に、入用になつた所以である」[15]と従来の知識のあり方を批判し、新たな学問の必要なことを熱心に説いているのである。

ここでは、まず社会成層についての研究が、第一期としての明治期の社会問題への関心と対応の動きを受けて、主に大正期から昭和初期にかけての社会科学、特に社会学においてどのように生成・展開されていくのか、を検討してみたい。本論文では、必ずしも、社会学の領域に限定せずに、いくつかの側面から跡づけることが試みられるべきであると考える。学史の再検討と同様に、個別領域の研究史の再検討は、困難な課題であるけれども、社会成層論の(a)方法論、(b)調査とモノグラフィー、(c)理論、(d)政策論と運動、(i)時期別検討、(ii)包括的な分析枠の検討と再構成、(iii)個別テーマの検討等が、課題として設定されるだろう。我国における従来の階級・階層論をめぐるマルクス主義（史的唯物論に基く階級論）か、非マルクス主義（機能主義的な社会的地位論、社会階層論、あるいは「社会成層」論）かといつた閉鎖的な固執[16]には、筆者は反対であり、歴史的・文化的・社会的な変化の中での問題状況への継承されつつも新鮮で真摯な接近こそが必要なのである。資源配分をめぐる不平等構造として社会成層が非成層化しつつも再成層化されつつある現代的状況にあつて[17]、改めて、閉鎖的で固定的な議論を脱けだすべく近代日本における社会成層研究の動向を再考察することが重要なのである。従つて、その研究史再検討の手始めに先の(a)方法論を中心に(ii)包括的な分析枠の検討と再構成の面からまず再考察していくことが適当と考える。

以下、近代日本の社会科学者達によつて社会成層の分析枠が方法論的にどのように用意されていつたのかを、①社会問題への対応、②「近代」科学の土着化と土着的科学の発達と普遍化、③歴史的社会的文化的諸条件（制度的状況）、資源配分、生活構造、階級形成と階級関係への考察、といつた基準に照らして個々の研究者（ここでは河上肇、高野岩三郎、高田保馬、戸田貞三、柳田国男の場合に限る）の動きを事例的に代表せしめて、二、貧困の近代的再編と階級論、三、社会的勢力論の試み、四、小家族化と社会生活の不安、五、郷土生活研究と「心意現象」論、の順でみていくことにする。

(1) この論文は拙著『社会的成層の研究―現代社会と不平等構造―』（世界書院、一九七〇年）の第六章第二節「大正期における社会的成層研究の展開」を新たな構想のもとに今回一つの論文として書き改め加筆したものである。

(2) Charles H. Page, Class and American Sociology, The Disl Press Inc., 1940（斉藤正二・内藤昭共訳『アメリカ社会学と階級理論』八千代出版、昭和四五年）（with a New Introduction by the Author, Schocken Books edition, 1969）

(3) Milton M. Gordon, Social Class in American Sociology, McGraw-Hill Book Company, Inc., (1950), 1958.

(4) Harold Jr. Hodges, Social Stratification, Schenkman, 1964.

(5) John Pease, William H. Form, and Rytina, Joen H., "Ideological Currents in American Stratification Literature," The American Sociologist, Vol. 5, No. 2, May, 1970, pp. 127-137.

(6) Ralf Dahrendorf, Class and Class Conflict in Industrial Society, Stanford Univ. Press, 1959（富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社、昭和三九年）、Anthony Giddens, Capitalism and Modern Social Theory, Cambridge Univ. Press 1971（犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社、昭和四九年）、A. Giddens, The Class Structure of the Advanced Societies, Hutchinson & Co. Ltd., 1973（市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房、一九七七年）

(7) 河村望『日本社会学史研究（上・下）』人間の科学社、一九七三年、一九七五年、斎藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年。

(8) 例えば一九二〇年代における若宮卯之助「日本社会学の方向」（『社会学雑誌』一九二四年）、一九三〇年代における下出隼吉『明治社会思想研究』、浅野書店、一九三二年、高田保馬「日本に於ける社会学の発達」（岩波講座『教育科学』第一八冊所収、一九三三年）、清水幾太郎「日本社会学の成立について」（『思想』一三八―一三九号、一九三四年）、松本潤一郎『日本社会学』時潮社、一九三七年、そして第二次大戦終戦直後の福武直「我国社会学の再建のために」（『社会学研究』第一巻第一輯、一九四七年）等。

(9) 拙稿「新中間層論序説」（法学研究、第四九巻第十号、昭和五一年十月）

(10) 石川啄木『時代閉塞の現状』（明治四三年）（『日本の文学・第一五巻』中央公論社、昭和四二年、所収、一二四頁。

(11) 同、一二二頁。
(12) 同、一二三頁。
(13) 田中直樹「高島炭坑問題の報道に関する一考察」(『日大生産工学部研究報告』第九巻第一号、昭和五一年)
(14) 柳田国男『青年と学問』(『定本柳田国男集、第二五巻』筑摩書房、一五九―一六〇頁)
(15) 同、一八二頁。
(16) 大橋隆憲編著『日本の階級構成』岩波新書、一九七一年、安田三郎『社会移動の研究』東大出版、一九七一年。
(17) 拙著、前掲書、特に第三章を参照のこと。

二、貧困の近代的再編と階級論

わが国での貧困問題、社会問題の実態が次第に明らかにされていく中で、当時としてはまだ急激な社会構造の構造変化に対応して、部分的に政策的立場からの調査研究が行われていたとはいえ、それらを科学的に究明していく方法、基準、蓄積等も充分持ち合わせていなかつたわけで、多くの場合、外国での貧困問題、社会問題の研究を紹介するという形での接近が一方で展開された。ここでは、特に河上肇の「貧乏物語」と高野岩三郎の労働者生活論のみをとりあげるにとどめる。河上肇(1879-1946)の貧困研究、マルクス主義研究などは、その代表的な事例であつたともいえる。

しかし、単純な直輸入的な紹介ではなく、彼の生涯にわたるたくましい屈折の中で、社会問題への純粋な共感と情熱、儒教的な心情、科学と理想社会への絶えざる追求・実践の中で築き上げられていくのであり、後に大正末、昭和期に入つてマルクス主義や日本の資本主義論をめぐつて、さまざまの集団が形成、分派、抗争を示していくことになるが、河上の生涯の実践は、単なるマルクス主義の教条絶対主義やその形骸化とは異なる道を求め続けていたといえる。河上は、『日本尊農論』(明治三八年)、『日本農政学』(明治三九年)等を著わしており、大正二年十月から大正四年二月にかけてヨーロッパ留学をし、その間の見聞感想をまとめて『祖国を顧みて』を大正四年に刊行した。

「へめぐりてあまたの国のさまを見て、住むべき国は日本とぞ思ふ」の歌で始まる『祖国を顧みて』では、特に西洋文明と日本を類型的に比較して、「西洋の分析主義と日本の一纒め主義―衣食住に就いての比較―」対比が興味深い。

西洋文明の特色は分析的で、単位と単位との分界が極めて明確な点に在ると思う。……余の考えでは、此の西洋の壁と日本の壁との差異が、正に西洋の個人主義乃至世界主義と日本の家族主義乃至国家主義との差異を表現して居ると思う。西洋人は何物にも限らず之を分析して同じ単位の集合を見ようと努める。そこで、建築物の壁でも人間の手で左右するを得る限りは、之を分析して、持ち運びに都合好き程度の単位たる煉化石なるものに解剖して仕舞う。而してその単純なる一様の煉化石を積上げて、遂には天を摩するばかりの大建築を造る。単位は小さいが建築は大きい。個人主義であるが世界主義になる。

日本文明の特色は非分析的で、凡て物を一纒めとする点にある。其故建築物の壁でも、西洋流の煉化石の集積とならずに、非分解的の、左右上下に不分割的の連絡を有つた、一個の統一物になつて仕舞う。その代り斯かる組織では大建築は出来難い。家族主義国家主義になつて、世界主義にならぬ所以である。(1)

大学生の河上が足尾鉱害地への救済に示した共感、農業・農村問題への関心にみられたように西欧での動きを目の当たりにし、近代国家と近代資本主義経済が確立されていく過程で、日本における貧困の近代的再編の社会問題に重大な関心を寄せていくのは自然である。『貧乏物語』はCharles Booth (1840-1916), Life and Labour of the People in London, (1892-1902), Benjamin Seebohm Rowntree (1871-1951), Poverty: A Study of Town Life, (1901) の研究を土台としたものであり、経済学者河上がヨーロッパ留学から帰国して、大正五年九月から十二月の間に大阪朝日に連載した極めて人道主義（あるいは儒教主義）的論集ともいえるものであつた。

「人はパンのみに生くものにあらず、されどまたパンなくしては人は生くものにあらずというのが、この物語の全体を貫く著者の精神の一である」。(2)「……余が人類社会より貧乏を退治せんことを希望するも、ただその貧乏なるものがかくのごと

く人の道（人生の目的―道を聞くという目的）を聞くの妨げとなるがためのみである」[3]。そして、《いかに多数の人が貧乏しているか》の検討を試み、(a)金持ちに対する貧乏人、(b)被救済民、(c)経済学上特定の意味をもつ貧乏人、のうち(c)の「貧乏人」に限定して、B・S・ラウントリーの肉体的栄養的条件を中心とした規定に従つて世界の最富国でいかに多数の貧乏人が存在しているかを紹介し、《何ゆえに多数の人が貧乏しているか》、更に《いかに貧乏を根治しうべきか》を説いている。「経済学上特定の意味をもつ貧乏人」とは、ラウントリーの規定に従つて、肉体の自然的発達を維持するに足るだけの物をわれわれの生存に必要な物と見なし、それだけの物を持たない者を貧乏人と考える。より具体的には肉体的に労働力の再生産のために一日に必要とされるカロリー摂取量、三五〇〇カロリーを標準として、これを最低限に満たし得る必要経費（食費、被服費、住居費、燃料費、その他雑費）を根拠にして、貧乏線が引かれる。従つて、ここでいう貧乏人は、この貧乏線以下の人々（その総収入が、家族員の単なる肉体的能率を保持するための最小限度にも足りない家庭―第一次的貧乏―）と貧乏線上の人々（その総収入の一部が、他の費途に転用されない限り、単なる肉体的能率を保持するために十分な家庭―第二次的貧乏）を指し、生活の必要物を享受していないという意味であつた。いわば、絶対的・客観的剝奪としての貧困であつた。そして、〈何ゆえに多数の人が貧乏しているか〉については、経済組織のあり方が問題であるという。それは生活必要品の生産が不十分だからである。多数貧民の需要に供すべき生活の必要品は、少し余分に造ると、じきに相場が下がつて、もうけが減るから、事業家はわざとその生産力をおさえる。「……今日生活の必要品が充分に生産されて来ぬのは、天下の生産力が奢侈ぜいたく品の産出のために奪い去られつつあるがためである。」[4]

最後の貧乏退治の方策では、(i)世の富者が自ら進んでいつさいの奢侈ぜいたくを廃止すること、(ii)なんらかの方法をもつて貧富の懸隔のはなはだしきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差なからしむること、(iii)今日のごとく各種生産事業を私人の金もうけ仕事に一任しておくことなく、たとえば、軍備または教育のごとく、国家自らこれを担当するに至るなら

ば、現時の経済組織はこれがため著しく改造せられうる、ことを指摘したことは興味深い。ここでは河上は、一九世紀最大思想家の一人としてカール・マルクスにも触れ、唯物史観、経済的社会観については、「幸いにも彼の経済的社会観に似た思想は古くから東洋にもあるものであり、孔子、孟子、熊沢蕃山等を挙げ、「ここに恒産なくんば因つて恒心なしとあるは、これを言い換えれば、経済を改善しなければ道徳は進まぬということなので、そうしてこれがいわゆる経済的社会観の根本精神の一適用なのである」（同書、一二二頁）という基本的な発想と捉え方をもつていたと同時に、相互規定的に、「身修つて後家斉い、家斉つて後国治まり、国治まつて後天下平らかなり」という禁欲的な儒教思想が根強かつた。また階級構成と階級関係についても、極めて一般的に富者と貧者（労働者階級）、生産者と消費者（労働者階級）としてとらえられているにすぎなかつた。河上はこれらを通じて彼のこの段階では「社会組織の改造よりも人心の改造がいつそう根本の仕事である」[5]として、社会を組織する一般の人々の思想、精神の重要性、なかんずく富者の責任を力説強調している。社会科学的な研究分析と具体的な社会政策を展開するには、当時まだそれらに必要な基礎資料が不整備だつたこともある。

その後、河上肇は個人雑誌『社会問題研究』を創刊（大正八年）し、次第にマルクス主義の立場を色濃くし、その普及・実践に活躍したが、『貧乏物語』で示された倫理的・道徳的立場、人道主義的社会政策、儒教的社会主義の性格を展開した。昭和五年（一九三〇年）に河上肇は『第二貧乏物語』を公刊した（昭和四年の春から翌五年の夏に至る期間に雑誌『改造』に連載発表していたもの）。ここではかつての『貧乏物語』に対して、一個の宗教的倫理的空想者としての「……私の過去は、現在の私にとつて恥辱以外の何物でもない」として、「世界戦争の真最中に、ロシアにおけるプロレタリア革命の前夜に、かかる倫理的宗教的空想に溺れていた過去の自分を見出すとき、私は今、全くの他人に面するかの感じがしている」[6]とまえがきしている。多年にわたる正直な思索の量的累積がもたらした質的変化の結果・到達としてのマルクス主義レーニン主義の立場から、弁証法的唯物論と唯物史観を説明し、それに基く、資本主義社会の経済構造とその崩壊を分析した。そして、昭和

八年には共産党に入党して、投獄をもなお恐れず、自らの立場を貫き実践した。

河上の『自叙伝』に如実にあふれているように、河上の立場が弁証法的唯物論、唯物史観、マルクス主義レーニン主義へ転換していつたといつても、彼の真摯な求道者、情熱に満ちた理想主義者としての生き方によつてやはり支えられていたといえる。このようにして外国での研究やイデオロギーをまず積極的に導入紹介することによつてであつたとしても、西欧近代の国家像や人間像についての単なる包括的な紹介と啓蒙の域を脱して、近代資本主義化のもとでの貧乏（貧困）問題、社会問題が学問的に追求される足がかりが用意されていつたと評し得る。また、特に社会主義者、マルクス主義者によつて近代資本主義という経済組織・経済制度・体制そのものに分析が加えられ批判対象化されるに至つたことは注目される。

こうした中で、高野岩三郎（1871-1949）は早くより社会問題や社会政策に関心をもち統計学や財政学、経済学の研究を進めていた。しかも、わが国の労働者生活や社会問題等についての実証的研究を先駆的に展開した。高野については、桑田熊蔵、山崎覚次郎、田島錦治、小野塚喜平次らと共に明治二九年当時から社会政策学会（研究会）の設立に大きな役割を果したことはよく知られている。明治三二年から三六年の間をヨーロッパ、特にドイツに留学し、マイヤ教授、ブレンターノ教授のもとで、統計学と経済学を研究して帰国し、東京帝大法科大学教授となるが、大正八年には法科大学から独立した経済学部教授の職を辞して、大正九年以降主に大原社会問題研究所の所長として活躍、多くの研究者を育て、労働運動にも関係したことは周知のところである。高野は、いまだ統計基礎が充分確立されていなかつたとしても、明治二三年と明治三一年の所得税統計（明治二〇年七月の税法から明治三二年の改正に至る初期所得税制では、一ヵ年三〇〇円以上の所得ある者に対しての課税で、世帯員の合算課税であつた）を用いて「……殊ニカノ社会党ノ多クロニスルカ如ク現時ノ経済社会ノ傾向ハ果シテ富者益々富ミ貧者益々貧シク中産者階級漸次消滅シ其極貧富相対シテ争闘ヲ事トスル一大修羅場ヲ呈スヘキモノナルヤ如何之ヲ事実ニ徴シテカ、ル傾向ノ有無ヲ判断スルハ誠ニ重要ノ問題ニシテ、又同時ニ甚タ興味アル研究題目タリ……」として、小所

得階級（三〇〇円～一〇〇〇円）、中所得階級（一〇〇〇円～一万円）、大所得階級（一万円以上）の構成変化の動向を比較検討することによつて「…吾人ハ……富者ハ益々富ム然モ貧者ハ益々貧スルコトナシト云フコトヲ得ベシ、カノ中産階級ノ漸ク衰滅スト云ウガ如キ事実ハ吾人之ヲ認ムルヲ得ザルナリ」[7]。「…小所得階級者ノ衰退ヲ断定スルハ誤マレリ、小所得階級者ノ衰退ニアラズ他所得階級者ノ進歩ナリ、小産者ノ地位ハ改良セラレナカラ中産者大資産者ノ一層大ナル発達アリタルナリ」[8]という当時における結論づけを試みていた。これは、あくまで所得額に限定した、短期間の比較検討なので十分に説得的な論理とはいえないが、日本の近代統計資料を活用して実証的に研究しようとする用意が次第に出来つつあつたといえるだろう。

高野は早くより社会統計の必要性を説き、わが国の社会統計事業の体系化、定着化、民衆化に大きな貢献をした。明治三五年一二月に国勢調査に関する法律が成立して第一回の国勢調査が明治三八年（一九〇五年）、第二回が明治四三年（一九一〇年）、第三回が大正九年（一九二〇年）と予定されていたが、日露戦争、その戦後財政整理等のために延期され、結局第一回の調査が大正九年に実施されたのであつた。それまでは個々バラバラの各種調査が実施されておつたが、それらは断続的であつたり調査項目に一貫性がなかつたり、調査及びその方法自体役人中心のもとで一括主義的なものであつた。大正六年に書いた論文においても「抑モ我国民全体ノ職業状態ハ今尚ホ統計上未知数デアル。誠ニ農商務統計表又ハ日本帝国統計年鑑ヲ繙ケバ……例ヘバ（区々別々ノ統計ハ現存スル）……然シナガラ人民全体ニ亘リテ其ノ職業ノ種類ヲ調査シタル材料ハ存在セヌノデアル。則チ我国民ハ如何ニ農工商其他ノ生産業ニ従事シ自己ヲ支持シ家族ヲ扶養シツツアルカ吾人ハ之ヲ詳ラカニシナイノデアル」[9]。「労働者問題ノ漸ク重要ヲ加フベキ我現状ニ於テ此ノ種ノ統計スラモ備ハツテ居ナイトハ心細イ訳デアル。又労働者問題ト相伴フテ発生スル所ノカノ中等社会階級問題ヲ理解シ解決スルニ方ツテ先ヅ吾人ノ要スル所ノ簡単ナル統計材料スラモ利用シ得ヌノデアル」[10]。また「我経済政策社会政策ヲ論ズル者ガ好ンデ外国ノ事例ヲ引用シ本邦ノ事情ヲ類

推セント欲スルモ実ニ止ムヲ得ザルニ出ルモノデハアルガ、遺憾ノ至リデアルト言ハネバナラヌ。此ノ点ハ実ニ亦国勢調査ノ必要ヲ証明スルモノデアル」[11]という当時の実情がよく説かれている。

商工行政、労働者保護、労働運動取締、貧民救済、防疫、防犯などに関して政府が政策立案、立法、行政を行なう上での必要のための調査から、まず基礎として事実を発見すること自体を目的とする客観的調査を確立しようとする点において、高野の功績は極めて大きかつた。[12]

国勢調査を軸とするこのような基礎的な統計資料をもとにして、わが国の人口、家族、職業、産業等の全貌がかなり客観的に考察されるようになつていくのである。[13]同じように大正十三年には第一回の「労働統計実地調査」（その後の「賃金構造調査」）、大正十二年以降の「職工賃金毎月調査」「毎月勤労統計調査」（大正十四年）「失業統計調査」等と労働統計、賃金統計においても基礎統計が確立されていつた。

高野は社会政策学者としての立場から、職業構成、階級構成等の資源配分をめぐつての関心、そのための基礎的資料が整備していく一方で、生活構造をめぐつての実証的研究においても重要な役割を果した。生活調査自体としては、明治期においてすでに前史的に鈴木梅四郎『大阪名護町貧民窟視察記』（明治二一年刊）、横山源之助『日本之下層社会』（明治三二年刊）等、農商務省農務局「農業小作人工業労働者生計状態に関する調査」（明治四二年）、内務省地方局「細民調査」（明治四四・四五年）、斉藤万吉「農家経済調査」（明治二八・三二・四一・四四年、大正元年）等が実施されていたが、ここでもやはり高野岩三郎らを中心とする人々の諸研究によつて特に労働者生活を中心としたその後の生活調査の基礎が築かれた。

大正五年「東京ニ於ケル二十職工家計調査」（調査方法は予め用意した家計簿式を採用し、労働者団体友愛会の職工二〇世帯を対象にして実施）、大正七～九年「東京市京橋区月島に於ける実地調査」（内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』、大正一〇年刊）は、続々と数多く実施された科学的統計学的な家計調査の先駆的な調査であつた。[14]前者においては一定

の調査期間（大正五年五月の一ヶ月）にわたつて所定の調査様式・家計簿式を採用して、職工家族自らが記帳する方式を採用したのであつた。高野は「若シ夫レ此種ノ調査ヲ方法ニ於テ一層完全ニシ規模ニ於テ幾十倍幾百倍ノ大ヲ加ヘテ実施スルコトアランカ、其ノ社会統計ノ進歩、社会政策ノ応用ニ与フル効益ノ大ナル蓋シ想像ニ余リアル。余ガ菲才ヲ揣ラズシテ敢テ小規模ノ調査ヲ試ミタル所以ノモノモ畢竟這般希望ノ実現ニ向テ幾分ノ貢献ヲ致サントスルノ微意ニ出ルニ外ナラザルナリ」[15]と考えていた。

後者の月島調査は、高野岩三郎の下に権田保之助、山名義鶴、星野鉄男を中心とした月島での参与観察法による実地調査であり（「調査方法としては調査地に直接調査所を設け専任の調査担当者が成るべく常に此処に居住し、処に慣れ民衆に親しみつつ実地の調査を行うことが得策である。……直ちに民衆に接触し、目の前り民衆の生活中より生れ出る所の調査でなければならない。それでこそ始めて調査の形骸に精神を与え、血と肉とを以て充ち満ちしむることが出来るのである」[16]。）、実に詳細な報告書（第一冊は報告本文、第二冊（附録一）は統計表、第三冊（附録二）は月島社会地図及写真）をつくりあげていた。

そして、この調査は、家計調査にとどまらずに、労働者の生活実態を結婚と家族、健康、衛生、住居、娯楽、教育、家計、労働事情などの統計調査を試みたものであり、本格的な家計調査の先鞭であつたばかりでなく、都市の地域社会調査及び「生活」調査を意図したものとして評価されるが、まだ労働者の「日常」の生活、欲求や意識、労働組合、労働市場、政治的状況等との関連などは明らかにされていなかつた。月島全島の社会階級の分布状態を大企業主（〇・五％）、小企業主（二四・七％）、自由業主（〇・六％）、役員（一一・〇％）、労働者（四七・二％）、無業不詳（一六・〇％）といつた階級・階層構成で地域社会の中で具体的に分析していたことは注目される[17]。だが、以後、職工、一般労働者、俸給（給料）生活者、中等階級、細民、農民、鉱夫、水産業者、沖仲仕等々の個別の数多くの家計調査の試みが促進される一方、また大正一五年に至り内閣統計局等による全国的な家計調査も実施されるに至るのであり、いまだ、特に労働者層の「家計調査」、また多分に統

計調査等に限定され、生活史調査や一定時点に限らない追跡的な調査は試みられなかつたとはいえ、大正期におけるこれらの労働者自らの記帳観察、地域での住民の協力のもとでの調査員の参与観察調査による実証的研究が着実に展開されていくうえで重要な役割をになつたことは高く評価されるだろう。

(1) 河上肇『祖国を顧みて』実業之日本社、大正四年、三―五頁。
(2) 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、四頁。
(3) 同、五頁。
(4) 同、八四頁。
(5) 同、一二九頁。
(6) 河上肇『第二貧乏物語』、昭和二三年の三一書房版、一六頁。
(7) 高野岩三郎「所得税統計ニ基キ我国ニ於ケル国民所得ノ増進及其分配ニ関スル研究」『国家学会雑誌』第二〇巻第七号、第九号、明治三九年、(第九号、九七頁)。
　付表①は、高野の試みた集計表より引用作製したものである。尚、近代日本の初期所得税制については、高橋誠「初期所得税制の形成と構造―日本所得税制史論、その一―」(『経済志林』第二六巻第一号、一九五八年一月)を参照。
(8) 同、(第九号) 一〇八頁。
(9) 高野「国勢調査実施ノ急務」『国家学会雑誌』第三一巻第五号、大正六年、九―一〇頁。
(10) 同、一〇頁。
(11) 同、一〇―一一頁。
(12) 『生活古典叢書、(八)余暇生活の研究』(氏原正治郎解説)、光生館。
(13) 例えば、「我国人口の階級的構成」『中央公論』昭和六年第一〇号。
(14) 『生活古典叢書、(七)家計調査と生活研究』(中鉢正美解説)、光生館、権田保之助「本邦家計統計調査」高野岩三郎編『本邦社会統計論』改造社、昭和八年、『生活古典叢書、(六)月島調査』(関谷耕一解説)、光生館、相原茂、鮫島龍行編『統計日本経済』筑摩書房、一九七一年、高野史郎「貧困調査と家

付表①　所得階級の構成比変化

(%)

		明治23年	明治31年
小所得階級	人　員	88.35%	82.98%
円　円 (300～1000)	所得高	50.79	46.96
中所得階級	人　員	11.36	16.58
(1000～1万円)	所得高	32.45	40.43
大所得階級	人　員	0.29	0.44
(1万円以上)	所得高	16.76	12.61

計調査の歴史」岩本正次・高野史郎編著『講座現代生活研究Ⅳ、生活調査』ドメス出版、一九七四年、『高野岩三郎伝』岩波書店、昭和四三年。

(15) 高野「東京ニ於ケル二十職工家計調査」（前出『生活古典叢書(七)』所収、一〇一頁）

(16) 内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告』、第一輯、大正十年、四―五頁。

(17) 同書、四九頁。

三、社会的勢力論の試み

近代日本の社会学における社会成層研究は、大正一〇年前後に米田庄太郎（1873-1945）や高田保馬らによつてまず理論的研究として展開された。この動きは、また、明治三〇年前後より顕在化してきた近代日本の社会問題を科学的に対象しつつも、勢い現実の動きから遊離して学問が次第に講壇化していく動きでもあつた。これは、また、明治期における福沢諭吉・横山源之助・柳田国男らの視座と運動が逆に欠落していく動向でもあつたと考える。

米田庄太郎（1873-1945）は、主に心理学的社会学を展開し、特に心理的相互作用を中心としたSimmel, Tardeの影響を受け、Ward, Small, Giddens等の社会学を含めて幅広い学説紹介をなしたが、社会問題や階級問題についても強い関心を示した（『現代社会問題の社会学的考察』大正一〇年）。論文「現代社会の階級分析」（『改造』第三巻第一号、第二号、大正一〇年）では、やはり主に欧米諸国の資料をもとにした理論的な階級分析を試みている。それは次のような階級構成に従つている。

①無産者階級（プロレタリア階級）
　(i)労働者階級―賃銀労働者階級（熟練・不熟練／産業の区別）
　　―月給取階級（その下層）
　(ii)窮民、細民

②中等階級

(i)旧中等階級（小企業者階級）（自らの資本・経営、自ら働き、独立の生活）
(ii)新中等階級（智識階級）―┬独立知識職業者階級
　　　　　　　　　　　　　└月給取階級（俸給階級）
③有産者階級（ブルジョア階級）

まだ、わが国の資料が活用されていないままに、欧米での階級理論、階級構成論を展開しているにすぎないといえないこともないが、ところどころで当時の日本の現状、わが国の未定着労働者、「出稼型」労働者、農村、小作制度等の問題についての鋭い観察がなされていた。

米田の弟子にあたる高田保馬（1883-1972）は、米田の社会問題や階級問題について、実証的関心よりも理論化への関心をより以上に展開し、独創的な社会学理論体系を発展させた。[1] 階級論についての著作は『階級考』（大正十二年）、『階級及第三史観』（大正十四年）、『勢力論』（昭和十五年）、『消費函数の研究』（昭和三一年）等がその代表的なものであろう。高田の青年時代の所懐については引用が長くなるが、

私の中学時代は一方に於て、学校の課程を追うて忠実に勉強をつづける平凡な生徒であつた。他方に於ては多感の文学青年であるとともに、時代の風潮にめざめて、社会思想の萌芽を胸に育成しつつあつた。中学四年の時に読ける一論文は私の胸に「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」という古人の一句を刻み込んだ。校友会雑誌に寄せたる長篇論文は貧乏を取扱へるものであつた。中学五年の春には、沈み行く落日を堤防の上から見下して、弱者の為の一生を思い定めようとした。高校一年のときに幸徳秋水の『社会主義神髄』を耽読して其口調さへ学んだ。理解し易かつたのは、それが主として孟子に学ぶところが多かつたからであろう。

同時に私は若干の流行の本を読んだ。それはトルストイとニィチェであつた。トルストイの『我宗教』を読むと共に、ニィチェの権力意志論を顧みることを忘れなかつた。……(中略)……。

早熟なる社会主義青年として大学に入学した。社会学の研究を志したのはこれによりて、社会思想の本質に見参しようとしたわけ

であるが、当時既に俊敏なるディイツェルは主義と理論の間に深淵の横たわることを教えた。社会の理想や目的を理知によつて捕捉することが出来ぬと思いあきらめたわけではあるが、いつもそれへの模索を忘れずにいた。……（中略）……。

明治の末期、民権自由の思想は既に日本社会に於て結実して、形ばかりの立憲政体は確立していた。そこで、私たち、少くも私の憧憬は、平等にあり、自由にはなかつた。自由については時代は求むるものを与えられたという感情が支配的であつたのであろう。日露戦争の後、民衆の生活はあまりに低く、別して農村の小作層は最低の生活に苦しんだ。郷里居村の人々の中には、死して碑石すらなく、犬猫の如く世を終ると形容すべきものすら少くなかつた。学生生活の末期以来、平等のみが遺失せられたる人道として想望せられた。(2)

『階級考』は明治四四年から大正九年の間に書いた論文を中心として構成されているが、その「はしがき」において、高田は、

明治四三年夏、大学を出でてから四五年七月まで、私は階級を中心として自分の研究を続けた。これは、階級と云う事柄が将来社会に対する熱情に燃えていた私の興味を強くひきつけたからであるが、又これは恩師米田博士の指導によりて先づ特殊問題の考察に着手しようと思つたからである。

併しながら、此研究は社会学上の他の何れの問題にも優りて私の不得手とする歴史的知識を必要とする。此事情から私は社会学一般の考察に転じ去つた。(3)

ここには、「社会学一般の考察に転じ去つた」高田のその動機と論理が充分説かれていないが高田保馬の社会学一般及び彼の階級論の特徴、すなわち、その理論化と綜合化という特徴を見出すことが出来る。彼は、階級の考察には二つの系統――(i)階級を争闘の単位と見る社会主義的見方、(ii)社会の組織に於ける区分と見る社会学的見方――があるとして、(ii)の社会の組織における区分と見る社会学的見方からの理論化、綜合化を進めたといえる。しかし、彼のいう社会学的見方というのは、

多分に機能主義的立場からのものであつた。

『階級考』で示された「階級の本質」、「階級の主観的基礎」、「階級の客観的基礎」、「職業の尊卑を論ず」、「階級の固定を論ず」、「階級の周流」、「階級基礎の変更」、「社会的水準化の傾向」、「国内の階級と国際の階級」、「社会問題の中核」、「社会連帯」等によつても彼の階級論の全貌がうかがえて、極めて示唆に富む包括的考察であつた。なかでも、階級の本質規定については、先の基本的立場から「社会内に於ける地位の同一に本く団体」「上下の別に本く団体」[4]であり、その客観的基礎は人の力の差（財産、武力、性能＝才能、出生＝門地）に求めた。[5]『階級及び第三史観』では「階級は社会的勢力（人々の意思を服従させる可能性）の類似に基く集団である」[6]（ここでいう類似とは勢力の大きさの類似である）。その場合の社会的勢力は、権力、富力（経済的勢力）、威力（dignity）の三者を含む多次元的分析を展開した。また、社会的部類から集団化していくプロセスでの階級の集団的形成は、個人対個人としての同類親和の傾向（第一段階）、階級同情（第二段階）、階級意識（第三段階）という動きとして動態的な把握が示されている。

更に階級基礎の変更や社会的水準化の傾向については、高田の「第三史観」とも関連し、論理的で独創的な指摘がなされている。もちろん、この「第三史観」あるいは社会学的史観[7]はE・デュルケムの分業論の影響を強く受けたものである。階級基礎は身分制度（権力の世襲）から財産、更に才能に、と変更するが、それは基本的に人口増加（人口密度の増大、社会的接触の範囲の拡大）が社会的密度の増大（これによつて反対または分離を減少させ、人々を打算的にする）を促すことによつてもたらされるのであり、そのことによつて力の集団的差異の消失過程と平等傾向の発達を導く、という考えである。上下の近接としての社会的水準化の傾向もこの巨視的なすう勢的な史観によつて展望される。そして、中等階級は衰滅していかないし、新中等階級も、国家集権の傾向、産業界集中の傾向に伴つて、著しく増加の動向にあると分析している。[8]そして、高田の階級論、社会的勢力論のもつとも注目される特徴は、社会的勢力の根底に人間の欲望、「力の欲望」という心理を見据えていた

こと、自己の力の優越を欲する欲望によつて人々の意思を服従させる可能性として勢力が規定されていたこと、であろう。

更に、生活標準、消費標準の規範性、拘束性という考察が高田の初期研究においてすでに構想され展開されていたことは注目される。[9] しかし、高田が生活を社会心理の面からも捉えこの生活標準または消費標準の規範性、拘束性の考察は、興味深いものであつたとしても、『貧者必勝』や『民族耐乏』のように逆に規範化され、強制化のためのイデオロギーとされる面をも持つていた。『論語』を引き合いに出して、「乏しきを憂えず、均しからざるを憂ふ」として「自分と他人の消費の比較に於いて、自ら優れていることを認める。此比較の仲介をなすものは一定の集団に於ける標準としての消費量である」。[10] 自らの「生活水準が上るにつれて欲望の重点が他に移され、今まで作用しなかつた欲望が強くなつて頭をあげてくる」。[11] そして、「……タルド、ヴェブレンなどの思想から生活水準、生活上昇に関する理論を構想するに際して、力の欲望の作用を考え、高き生活を民衆への誇示と知るに及んで、生活様式の上の謙譲こそは平等主義の究極境地と認めざるを得なかつた」[12] のである。

西洋の優者劣敗・勝利の幸福という文明に対して、東洋の禁欲主義・解脱の幸福の文明を説くに至ると、社会の歴史的制度的諸条件、庶民生活の実態を検討しないで、国民・民族耐乏、貧者耐乏を道義的倫理的に説く精神主義に傾斜することになる。「生活様式の上の謙譲」は一面では今日において確かに妥当性をもつているし、また高田が理論的に考察した社会的水準化の傾向、平等の傾向と結びつく面をもつているとしても、それが、客観的、そして相対的な現実から遊離して、一定標準に拘束され、規範化されることによつて、逆に人々の自立と連帯の歩みは踏みにじられていくことになる。あるいは踏みにじられていくことに逆用される危険性を内包していた、といえる。

このようにして、高田は、「経済的勢力の性質的類似」とみるマルクス的階級概念とは対照的な区別をして、自らの「社会的勢力の性質的類似とみるもの」としての社会的勢力説の立場からの階級論であり、『階級及び第三史観』（大正一四年）

ではその傾向が一層明確にされた。彼の階級論の特徴は、理論的、綜合的研究であり、社会的勢力説による多次元的・動態的・巨視的な考察であつた。その意味では、これまでのわが国の成層理論のもつとも先駆的な体系化の展開として高く評価されなければならない。

しかし、その当時、他方では社会政策学や社会学の内部においても、またマルクス主義の立場においても実証的・歴史的な研究が試みられつつあつた状況においては、[13] 彼自らも述べていたように彼の階級論は、米田庄太郎が示した歴史的で現実的な社会問題への意欲的な関心は薄れ、実証的・歴史的分析に乏しく、極めて一般的包括的な展開であつて、思弁的性格を色濃くもつものであつた。筆者は、高田の「階級基礎の変更」、「社会的水準化の傾向」、すなわち「……現代の社会にありては、身分の制度殆ど亡び僅かに名称の貴族としての余命をとどめ、財産は上下の別を定むる唯一の標準となれるかの観あり。然れども平等の思想の作用は思うに大勢をここに喰い止むる事なし。社会主義的傾向がその目的を到達せんことは、よし近きにあらずとするもまた決して空想に非ざらむ。此の如くなるに至らんか、階級の主たる基礎は再転して才能とならざるを得ざるべし」[14] という発想・仮説命題に強い興味をいだくが、これも、現実の分析から導かれたというよりも演繹的・論理的帰結によるものであつた。

(1) 高田保馬『分業論』有斐閣、大正二年、同『社会学原理』岩波書店、大正八年、同『階級考』聚英閣、大正一二年、同『階級及第三史観』改造社、大正一四年、同『勢力論』日本評論社、昭和一五年、同『貧者必勝』千倉書房、昭和一五年、同『東亜民族論』岩波書店、昭和一四年、同『民族耐乏』甲鳥書林、昭和一七年、同『社会科学通論』有斐閣、昭和二五年、同『改訂、社会学概論』岩波書店、昭和二四年、同『消費函数の研究』有斐閣、昭和三一年、大道安次郎『高田社会学』有斐閣、昭和二八年。
(2) 高田『消費函数の研究』一一三―一一五頁。
(3) 高田『階級考』(前掲)、はしがき、一頁。
(4) 同、一二頁。
(5) 同、六八頁。

(6) 高田『階級及第三史観』（前掲）、三頁。
(7) 高田『階級考』、二〇八～二一二頁、『階級及第三史観』参照。
(8) 高田『階級考』、二三一―二三二頁。
(9) 高田『消費函数の研究』（前掲）。
(10) 同、九八頁。
(11) 同一〇五頁。
(12) 同一一五頁。
(13) 先の節で触れたように高野岩三郎や、権田保之助らの社会政策学の人々による研究、地方自治体等による多数の家計・生計調査、また『社会学雑誌』は日本社会学会第一次大会のテーマ「社会階級研究」を特集にし（第二一号、大正一五年）、服部之総「村落結合関係と離村現象」（大正一四年）、同「社会階級論」（大正一五年）（いずれも『服部之総全集、1』福村出版、一九七四年に所収）が発表されていた。後に松本潤一郎によっても、「博士は此階級的努力の分析に関して前人未踏の深きに達したのは事実であったが、これは固より形式的な観察である」、「要するに形式的階級概念は克明に追求されたのであるが、歴史的現実事実に対する対応は殆ど怠られた傾きがある。就中社会階級の集団性は形式的乍ら吟味せられたのであるが、階級的活動即ちその社会過程とそれ以上の事実は適当なる論考の機会を恵まれずに了つたのである」と評される。松本『日本社会学』（前出）、二九頁。
(14) 前出『階級考』、二二〇頁。

四、小家族化と社会生活の不安

生活構造をめぐつての実証的研究の試みは、日本の家族の研究においても著しい展開を示すに至る。『家族の研究』（大正十五年）、『家族構成』（昭和十二年）等と戦前の家族社会学の領域で画期的な成果を残した戸田貞三[1]（1887-1955）は、大正十一年に二カ年余の米国・ヨーロッパからの留学より帰国して、「一般的にいつて、アメリカ社会学から理論的に学んだところよりも、実際の社会現象をつかまえて深く探求してゆくという学風に大いに学ぶところがありました」、「……最初、婚姻制度の講義を準備してやつてみましたが、どうもポイントがはつきり摑めずうまくゆかない。それで最初に出発した点に戻つていろいろ勉強しているうちに、ファミリーという言葉と日本でいう家という言葉がどうもぴつたりしないのではないか

ということに気がつき、この家、家族と日本でいわれるものの概念内容を歴史的にみてみようと思うに到りました[2]」ということで、戸田は家族の集団的特質の究明に力点をおいた。家族を外側から制度して捉えるのではなく、人々の感情的融合、愛情にもとづく人格的融合といつた内部的要求にもとづいて生ずる「家族結合の意味ならびにこの意味に従つてあらわれる家族的集団の機能および形態を明らかにすること……」であつた[3]。従来、「家族」が主に法制度や道徳的・倫理的な面から考察されていたのに対して、戸田貞三は家族を社会集団として捉え、その動態を特に先に触れた大正九年（一九二〇年）の第一回国勢調査結果の資料を活用（全国約一、一二〇万世帯の一〇〇〇分の一、すなわち、一万一二一六世帯の調査票写しを活用）して実証的に研究を進めた。

まず、戸田による家族の集団的特質は、次のように指摘される。すなわち、

(1) 家族は、夫婦、親子およびそれらの近親者よりなる集団である。
(2) 家族は、これらの成員の感情的融合にもとづく共同社会である。
(3) 家族的共同をなす人々の間には自然的に存する従属関係がある。
(4) 家族は、その成員の精神的ならびに物質的要求に応じて人々の生活の安定を保障し、経済的には共産的関係をなしている。
(5) 家族は、種族保存の機能を実現する人的結合である。
(6) 家族は、此世の子孫が彼世の祖先と融合することにおいて成立する宗教的共同社会である。

家族のもつこれらの集団的特質を検討したのちに、(5)、(6)は除かれ、戸田は特に(1)、(2)の特質を強調して「家族は、夫婦、親子ならびにその近親者の愛情にもとづく人格的融合であり、かかる感情的融合を根拠として成立する従属関係、共産的関係であるということになる[4]」規定を展開していた。戸田は、家族が夫婦、親子および近親者等の感情的融合にもとづく集団

であるという基本的認識から変貌しつつある家族生活、近代日本の新たな動きと不安を把握しようと意図していたことは明らかであり、この分析枠によつて実証的な試みのもとで、近代日本における小家族結合化の増加傾向および一般性を指摘していた。

統計資料の活用によつて、家族形態についてはこの時点で依然親子結合を中心とした直系家族、複合家族を中心としているが、しかし、産業化、都市化の影響によつて(i)小家族化、核家族化、更に(ii)非家族的生活者（単身世帯）の増加を指摘した。

その大正九年の国勢調査資料の分析を通じて、(i)小家族化、核家族化については、わが国の家族＝家長的家族（世代を通じての家族団体の永続化、すなわち、家系の連続に重点を置いている家族）を特徴としており、その家族構成は依然世帯主の直系傍系の血族、および姻族等で近親者をも含んでいるが、大部分を占めているのが世帯主とその子でという構成を示しているという。また「最近わが国の各地方におけるこれら大都市の生活形式（様式）―諸社会関係の複雑化、人々の交通圏の拡大、動的密度の増加、家族単位に行なわれる産業の減退等―が徐々に普及し、各地方の人々はその生活様式において漸次都市人に追随しつつある」[5]。国民が家族団体の永続化を求める傾向は依然強いが、「今後わが国においては、家業として存続し得るがごとき業務の種類は次第に狭くなり、各家族の員数は徐々に縮小し、同一の家族員たり得る近親者の範囲はいままでのものより一層狭くなるだろう」[6]という傾向をすう勢的なものとして、位置づけていた。

従つて確かに職業別にみれば世帯主の職業が農業、水産業等の場合には家族員は職業の性質上比較的共働しやすくなつているので、多少員数の多い家族を形づくり、商工業、交通業、公務自由業等の場合には家族員はややもすれば別れやすくなつている故に家族員数の少ない小集団を構成するのであるが、両者の差は僅かであり前者の場合にも少集団化する傾向をもつていると捉えていた。

(ii)非家族的生活者（単身世帯）の増加については次のような興味深い把握をしていた。一般にどこの国でも、人々の家族生活との結びつきは強いが、日本においては特に、(a)親子は出来るだけ同一家族の内に止まるべきものと伝統的に定めており、親子は感情的に強く結ばれ、なるべく親と同居して親を慰むべきだとされていること、(b)家族融合のために家族生活における婦人の役割が強調されること、(c)家屋、食事、下宿、旅館等をみても、衣食住の形式（様式）等が著しく家族本位に出来上がつていることにより、独身者には頗る不便であること、などによつて、家族生活との結びつきが強化されてきた。(7) 従つて、家族から離れた不安定の生活に入ることは比較的少ないと考えられる。だが「近代文化が次第に複雑化するにつれて、人々の生活要求は家族内における機能だけを以てしては次第に充され難くなり、種々なる生活要求に応ずるため、家族外に多くの社会関係が形づくられ……」、「……近代都市生活者にあつては、何程か家族的共同から離れざるを得ないようになつている」。(8)

表Ⅰは、戸田貞三によつて、世帯の一隅に参加しているが、実質的に家族構成員とみなされていない、同居人、使用人、来客、食客等の人数の、年令階層別、地域別、男女別の割合であり、特に、一五～一九歳、二〇～二四歳、二五～二九歳の年令階層に、また東京市、六大都市、全国の順で、女よりも男に「非家族的生活者」の割合が多いことが示されていた。国民の生活要求が次第に増加し、人々は種々の要求を充実せんとしつつある一方、同時に、そのことがまた家族外に不安定な生活を送る人々、家族内に内的安定を見い出し得ぬ人々を多くしていたといえるだろう。戸田が、このように近代化の過程での家族生活における(i)小家族化、核家族化、(ii)、非家族的生活者の増加の傾向を、実証的に、先駆的に摑えようとしていたことは、注目されなければならないだろう。

家族の集団論、動態論、通婚圏、職業世襲、家族周期等の研究は、戸田の研究によつて一層刺激され鈴木栄太郎や喜多野精一、小山隆らによつて引き継がれていつたが、戸田の家族研究が統計的な研究を中心とするものであつただけに日本の

「家」、「家連合」を文化的・社会的・歴史的文脈の中でその実態が把握されるべきであるという批判が有賀喜左衛門、及川宏、喜多野精一らによつて展開されてきた。

こうした批判は、昭和初期の日本の地主小作関係や資本主義をめぐつての論争の中で提起されたわけで、生活連関、系譜関係、支配関係、地縁関係の中で制度的状況や生活構造を深く研究することの必要を強く徹底せしめたといえる。日本の家族研究において、このように家族を諸制度―家族生活集団―内部的要求（家族結合の意味）という連関のうちに把握すべきであるとする基本的視座が次第に確立されてきた。家成員の社会関係の差異に注目しつつ小家族結合論の立場か、あるいは文化的・社会的・歴史的な諸条件のもとでの制度体として生活集団論の立場か、の違いはあるけれどもこれらによつて家族の研究水準は一段と高められた。そして、大正期およびその後における生活構造の新たな変化として、都市においても、また農村におい

表 I　戸田貞三の推計による単身生活者（「非家族的生活者」）の割合
（男女別・年令別）

（%）（大正9年）

年令別＼男女別・地域別	男 全国	男 東京市	男 六大都市	女 全国	女 東京市	女 六大都市
0～4歳	2.9	4.6	3.7	2.1	—	5.4
5～9	2.5	3.9	2.7	2.6	1.0	3.4
10～14	8.7	35.4	26.5	12.4	14.9	12.8
15～19	33.9	71.7	66.4	30.1	53.0	47.8
20～24	36.3	69.2	67.5	17.2	43.8	35.1
25～29	21.6	47.6	41.4	9.6	15.2	15.9
30～34	9.6	20.5	15.4	5.4	10.1	7.7
35～39	8.4	12.1	12.5	3.7	11.4	8.4
40～44	6.0	9.7	10.2	2.9	3.7	5.8
45～49	6.1	8.5	6.9	4.2	6.7	7.1
50～54	5.1	9.8	20.6	4.9	15.8	11.6
55～59	5.5	34.8	11.8	4.3	16.0	11.3
60～64	5.1	5.9	13.2	5.3	15.8	11.6
65～69	6.4	4.8	6.3	5.8	26.3	14.3
70歳以上	3.6	—	13.8	6.9	4.5	12.1
計	11.9	34.9	29.8	8.7	19.0	16.5
男女合計	10.2	27.3	23.8			

（注）(1) 戸田貞三『家族構成』125頁の第1表，第2表，131頁の第3表，第4表，133頁の第5表，第6表より。
(2) 各年令階層に対する各地域毎の単身生活者の割合を示している。
(3) 六大都市とは，ここでは，東京，横浜，名古屋，京都，大阪，神戸。

てすら、①小集団化する家族、②社会化と扶養の新たな問題、③技術・生活様式の変化と雇用化に伴う日常生活の不安定等の諸問題をひき起しつつあつたのである。

(1) 戸田貞三『家族の研究』弘文堂、大正一五年、同『家族構成』(昭和一二年)(新泉社、昭和四五年)。戸田の明治四五年の東大卒業論文は「日本における家の制度発達の研究」であつた(『日本社会学院年報、第一巻一、二合併号』大正二年に掲載)。
(2) 戸田「学究生活の思い出」『思想』三五三号、一九五三年、九〇頁、九一―九二頁。
(3) 戸田『家族構成』新泉社、一七頁。
(4) 同、四八頁。
(5) 同、二七七頁。
(6) 同、二七七頁。
(7) 同、一一八頁。
(8) 同、一一六頁。

五、郷土生活研究と「心意現象」論

柳田国男(1875-1962)の研究については、「近代日本における社会問題への関心と対応」というテーマの中で、柳田の官僚時代における農政家から民俗研究への動きを別に他の機会にとり上げる予定なので、ここでは、彼がすでに官界を去り「本筋の学問」を展開していく中での彼の郷土生活研究と「心意現象」論を中心にみていきたい。無謀であるとの批判を甘受せねばならないかもしれないが、柳田の生涯を大きく(i)彼が東京帝大、法科大学政治学科を卒えて明治三三年役人として農商務省農務局に勤務する頃迄の、流転、多感、文学の時期としての青春の時代、(ii)それ以後大正八年(柳田、四四歳)に貴族院書記官長を辞任するまでの、農政学から民俗の世界へ関心が深められる官僚エリートとしての官僚時代、(iii)朝日新聞論説委員、国際連盟委任統治委員会委員としてのヨーロッパ滞在、そして大正一二年に関東大震災の報に接し同委員を辞任して帰

国するまでの、漂流・外遊の時代、(iv)そしていよいよ「本筋の学問」への専念を志し、民俗を基礎とする学問運動と民俗研究の組織化を試みた、終戦に至る民俗研究専念の時代、(v)戦争の惨禍・終戦後の混乱の中から「新国学」としての民俗学を深めようとし、晩年の『海上の道』（昭和三六年刊）に至る、新国学としての民俗学の新たな模索時代、に分けてみることも可能かと考える。彼の常民生活の研究は、根底には①近代日本における農民・農村の疲弊、貧困、②常民の多様な生活とその変遷、③日本人の起源と日本文化の連続性、への強い関心によつて支えられていたといえるだろう。冷害、負債、小作化、離村、家とムラの生活の変化等に対する強い関心が、常民史や生活の深い構造（「生活外形」、「生活解説」、「生活意識」）を跡づけ、すなわち、世の常の推移を民間伝承を用いて掘り起す作業、郷土生活研究、みる人の学問からみられる人自らの学問を通じて、そのことの中から土着的に常民自らの広い知識を再構成していこうとする志向が展開された。「饑饉といえば、私自身もその惨事にあつた経験がある。その経験が私を民俗学の研究に導いた一つの動機ともいえるのであつて、饑饉を絶滅しなければならないという気持が私をこの学問にかり立て、かつ農商務省に入らせる動機にもなつたのであつた」[1]。このような彼の動機の支えられて『農政学』（明治三五―三八年）、『農業政策学』（明治三五―三六）、『農業政策』（明治四〇年）、『後狩詞記』（明治四二年）、『遠野物話』（明治四三年）、『時代ト農政』（明治四三年）、『青年と学問』（昭和三年）、『都市と農村』（昭和四年）、『明治大正史、世相篇』（昭和六年）、『郷土生活の研究法』（昭和一〇年）等を著した。従つて、単に民俗学（folklore）の面白さだけでなく、その根底に日本一小さい「家」に生れ育ち漂流の中から広く社会問題への関心と土着的な学問形成へのなみなみならぬ柳田の持続的な意欲があつたことを忘れてはならないだろう。

ここでは、先に触れた柳田の生涯の第四の時期、すなわち、民俗研究への専念、「本筋の学問への専念」の時期（大正十二年に英国で関東大震災の報に接し、ついに国際連盟委任統治委員会委員の職を辞して、その年の暮に帰国、「……ひどく破壊せられている状態をみて、こんなことをしてはおられないという気持になり、早速こちらから運動をおこし本筋の学問のために起つという決心をし

た」[2] 大正末期から昭和一〇年代に至る過程で特に①民俗学を基礎とする学問運動—そのための数多くの講演、旅行、雑誌『民族』（大正一四年—昭和四年）『民間伝承』（昭和十年）の創刊、また『青年と学問』（昭和三年）、『都市と農村』（昭和四年）、『蝸牛考』（昭和五年）、『明治大正史、世相編』（昭和六年）等の著作、②民俗研究の組織化—民間伝承論の会・木曜会、郷土生活研究所の設立、日本民俗学講習会の開催、日本民俗学講座の開講、『民間伝承論』（昭和九年）、『郷土生活の研究法』（昭和十年）等の著作による方法論的基礎づけ、が展開された時期）における郷土生活研究と「心意現象」論における方法論をとり上げる。

彼の学問に対する考え方が、「……これほど眼前に痛切なる同胞多数の生活苦の救解と未だ何等の交渉をも持ち得ないというのは実に忍び難き我々の不安」[3]であり、「学問、殊に最も精確なる学問が急に御互ひの生存の為に入用になつた所以である」[4]として、民俗学を構想し、それが眼前の疑問への解答、学問の実用、学問救世としての役割を担うものであるばかりでなく、究極にはそれが「人が自ら知らんとする願」によつて、人が自己を見出す為の学問として基礎づけられなければならない[5]、という考えに立つものであつた。

しかも、「個々の民族の自身の立場から、その今日の国情を作り上げた諸原因、殊に種々なる文化段階の併存と、落伍者の不幸なる生活とが必ずしも天分とか運命とかという空漠の法則で無く、それぞれ原因を挙げて説明し得るようになれば、結論は自然に変化せざるを得ぬのである」[6]。『郷土生活の研究法』においては方法論的な展開が試みられて、まず①柳田の民俗学の対象は郷土生活であり、その「平民の過去」「世の常の推移」を明らかにすることであり、彼のいう平民・常民の郷土生活は、(i)平民の日常的に繰り広げ、受け継がれてきた生活と生活空間—日常性、連続性、自治—、(ii)一つの鋳型にはまつた暮し方ではなく、地方的に久しく、色々の異なる暮し方—多様性—、(iii)都市生活と農漁村・山村生活の包摂—連帯性—を内包するものである。

更に②郷土研究の態度は、「自ら知ろうとする願い」という平民の内側からの強い自然の要求に支えられて、「構へざる態

度」を以つてなさるべきであり、③その方法は、記録文書としての計画記録や偶然記録よりもむしろ民間伝承（書き言葉よりも話し言葉、さまざまの生活様式、儀式、行事、民具、象徴、遊び等々の豊富な資料）の採集記録によつて基礎づけられて、文化の継承の側面を重視しつつ展開されるべきだと考えていた。集めた資料は相互に連絡し比較調査すべきであり（重出立証法）、「出来るだけ多量の精確な事実から帰納によつて当然の結論を得、且つこれを認むること、それ即ち科学である」。「社会科学の我邦に於て軽しめらるる理由は、この名を名のる者が往々にしてあまりに非科学的だからである」[7]と考えていた。

このように柳田の民俗学が、特に、平民・常民の生活に基本的な視座が捉えられ、「……実際生活の疑惑に出発するものであり、診断が事実の認識を基礎とすべきである限り、国の前代の経過を無視したる文化論は有り得ない」（『民間伝承論』）という立場から歴史が把握される。柳田の史観は、「差迫つた疑問の最も繁多な近代史」にこそ向けられているが、「前代の経過」を踏まえた「世の常の推移」の中にこそ支えられるものなのである。柳田は歴史を平民・常民の生活の日常・非日常的な歩みとして捉えるが、それらは単なる繰り返し、回帰性、「一回性のない歴史」[8]としてでもなく、また単なる一回性の強調、「段階」「断続」論としてでもない、いわば二つの史観を包摂した、持続的、連続的、重層的、過程的変化としての歴史観であり、歴史を実際に担つてきた、また担つていく人々の側から把握しようとしていたと考える。

従つて、古風と今風の生活という二重生活は「常に双方からの歩み合いである」。「そうした場合でも、他から冷やかな眼で見ればこそ矛盾とも評せられるが、当の本人たちの現実に於いては、そんなことは気にせずに幾らでも暮して行けるのである」[9]。これらの暮し方は、「一回性のない歴史」としてかたづけるにはさまざまの動きをもつているし、段階論で断じてしまうには断じ切れない内容を含んでいるといわなければならないだろう。歴史的変化を広い意味での人々の選択的行為に基く生活の持続的、連続的、重層的な変化として捉えていた、といえる。

そして、歴史的変化を支えている常民の生活の変化には「幾通りもの変遷」があるのであり、日本人の飯を食い米の酒を

のむという例にふれながら、「単にこれに携わる者が自ら推移に心つかず、依然として昔発生したままと思つているうちに、内容はいつとはなく変化して、暫らく過ぎると同じものは名前ばかりになつてしまつたものも色々とある。この変遷こそ今日を作つて居るのである」[10]。ここに変化における意識的な変化と「無意識の変化」とが相互に切り離し難く結びついているのであり、むしろ「無意識の変化」という深層によつて支えられていくことをみている。

別のとらえ方をすれば、新たな変化の制度化の試みは、日常化の媒介的プロセスを経ずには定着・安定化はしないのであり、逆に日常の常民の幸福を考えない新たな制度化は無意味であり正統性を持ち得ないという主張になるのではないだろうか。明治以降の権力者による上からの急速な新国家主義、中央都市中心主義による新たな変化・意識的変化の試みが常民の日常生活の営み、無意識の変化の深さを軽視したところに、柳田の民俗学に対する意欲が展開されていくと考えられよう。われわれが近代日本における社会成層研究の生成というところで柳田をとり上げるのも、こうした観点からに他ならない。「見る」ものと「みられる」ものとが分化・対立し、常民生活が「見られる」ものとしてのみ対象化されることを否定する試みとして、柳田の民俗学の構想が展開していく。

柳田によつて、無意識的な変化と意識的変化とが切り離されないで持続的、相互媒介的、重層的な過程・動態として把握されることによつて、常民生活も決して、固定・停滞したものではなかつた。楽観的とも云える程に、常民の生活の豊かさ、自立と連帯の歩みを跡づけ、踏みしめ、より確実なものにする、もつと賢くなれるという信念によつて、支えられていたといえるだろう。

民俗生活、常民生活はどのようにして自らの知識とされ、自らの仲間の力とされていくのだろうか。『民間伝承論』（昭和九年）では、(i)生活外形（生活技術誌）―目の採集＝旅人の採集、(ii)生活解説（言語の知識）―耳と目の採集＝寄寓者の採集、(iii)生活意識―心の採集＝同郷人の採集、に分類されているが柳田の口述とされる「民俗資料の分類」[11]においても、同様に(i)

有形文化―眼に訴えるもの、具体的には「自然に近づく順序をもつてするのが主旨であるから、まず最も物質的なものから入つていこうとするのである」として、住居、衣服、食物、（生活）資料取得方法―自然採集、漁、林、狩、農、交易と市―、交通、労働、村、連合、家・親族、婚姻、誕生、厄、葬式、年中行事、神祭、占法、呪法、舞踊、競技、童戯と玩具をあげる、(ii)言語芸術―耳を通して得られるもの、具体的には、新語作成、新文句、諺、謎、唱えごと、童言葉、歌謡、語り物、昔話、伝説等をとりあげている。(iii)「心意現象」―単に感覚に訴えるもの、具体的には、知識、生活技術、生活目的（人生の究極の目的、何を欲するか、人々の幸福、家の永続の願い等）を検討している。

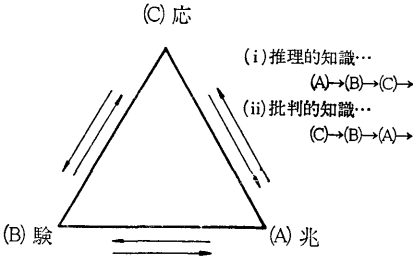
この「心意現象」、生活意識は、「これこそ我々の学問の目的」であり、(i)「一部」と(ii)「二部」の「二つは、いわばこれに達するための、途中の階段のように考えているのである」[12]。「三部」の心意現象（生活意識）をここでの究極の課題としているところから、単純に図式化するとすれば、有形文化⇄言葉⇄心意現象（生活意識）という動態的な構造として描くことができるのではないだろうか。

心意現象は、あくまで感覚に訴えるもの、イメージ、心意の世界なのであり、感覚、感情、情動、信念、信仰等に支えられた「知識」「生活技術」「生活目的」（総じて知恵の世界）なのである。柳田によつて意図される一つの例として、自然の変化、技術変化、社会変動の中で心意の世界がゆれ動き、微妙に、多分に無意識のうちに変化している様子を、またそれらが新たな意欲と用意をよび起し、次の変化を導き出していく動きをとらえたものとして、『雪国の春』（昭和三年）、『木綿以前の事』（昭和一四年）、『明治大正史、世相篇』（昭和六年）などに確めることができる。「ようやくにして迎ええたる若春の喜び」[13]、「……再び真冬の寂しさに復帰することは、馴れて後までもなお忍びがたいことであろうが、……冬籠りする家々には、古い美しい感情が保存せられ培養せられて、つぎつぎの代の平和と親密とに寄与していたのである」[14]。紺の香と木綿の肌ざわり、色音、味覚の変化、外食、明り障子やガラスの導入、火の分裂、都市人の顔の表情、眼つきの険しさ、恋愛など、そして、

「珍しい事実が新聞には時々伝えられる。門司では師走なかばの寒い雨の日に、九十五歳になるという老人がただ一人傘一本も持たずにとぼとぼと町をあるいていた。警察署に連れて来て保護を加えると、荷物とては背に負うた風呂敷包みの中に、ただ四十五枚の位牌があるばかりだつたという記事」[15]などから、心意の世界を掘り起し、そこから、前代との連がりのうちに近代史の変化と問題を跡づけて、生産と商業、労力の配分、貧と病、人間関係の変化、生活改善の目標等を考察しているのである。

また、柳田のいう知識は近代科学でいう「知識」に限定されないものであり、より包括的なものであつた。すなわち、(i)推理的知識（「なぜ」）と(ii)批判的知識（「どちらがよいか」）を共に包含するものであつた。想像力、知、智の三者が相互に媒介し関連づけられるのであり、別の表現をすれば、(A)兆（omen）、(B)験、(C)応（行為・実践）の三者の相互関連として知識が体系的に把握されていたといえる。(A)兆（感性・想像力・知恵）から(B)験に向う動きは(i)推理的知識といえるし、(C)応（批判、行為実践）から(B)験（理性、言葉）をみようとするのが(ii)批判的知識である。（図Ⅰを参照）。

図1．知識体系



（注）この図は柳田国男「民俗資料の分類」に基く筆者の図式化である。

(i)推理的知識について、「だいたいに原始人の科学は実験からのみ来ているので、最も科学的であるわけだが、同時にまた何か偏つた、あるいは誤つたメンタリティが入りまじつているために、現在の兆と称するもののなかには、古人の観察の今さらに敬服するに足るものがある一方には、また腹を抱えて笑うようなものが隣同士で平気で並んでいるのである」[16]（ethno-science）。また(ii)批判的知識については「近代の知識は推理的なものから批評的なものへと移つてきた。昔は推理によつてあらかじめ定めたのであつたが、しだいに行為をあとから省みるようになつて、そこに批判が生れてきたのである。即ち言葉をかえていえば、兆が発達すれば推理的知識に赴き、応が発達す

れば近世の批評精神というものに入つてくるのである」[17]（modern science）。先に触れたように、柳田は両者を綜合して知識体系の中に組み込んでとらえていた。いずれかに偏つて、固定してしまう状態は決して豊かな知識体系とはいえないのではなかろうか。

このようにして柳田は民俗生活の豊かさ、深さ、生活力の源泉を今一度、我が国に於いて掘り起すことによつて、自らを知らんとする願いのうちに逆に心意の世界から包摂した知識体系としての民俗学を確立することによつて、近代日本の諸問題を解き、新たな民俗生活のあり方を模索したといえる。個々人をバラバラにしてしまうのではなく、近代における人々の自立と連帯の仕組みを「ムレの行動の愉び」のうちに、どのようにつくり上げていくかということが課題なのである。また、「即自的階級」（Klasse an sich）から「対自的階級」（Klasse für sich）への移行は歴史的社会的文化的諸条件との中でとらえられるべきであり、階級意識の「弱さ」「停滞」を単純に「虚偽意識」ときめつけることは出来ないし、「革命指導部の意識」と「大衆意識」とは簡単には重ならない。

日本人の悠急さを確認しようとしていたのではないか。定住・安住の世界は、ともすると、執着、陰謀、虚偽等を導き易い。漂泊・移住の世界は、大胆な思い切り、勇気、緻密な計画と用心、悠長さ等が必要である。『海上の道』（昭和三六年）に至る構想は、和辻哲郎の描いた『風土』の日本人の生き方というよりも、日本人のより積極的で柔軟な姿、悠長さ、「群れとともに生きる知恵」「ムレ行動の愉び」を日本人の民俗生活、常民生活、特にその心意の世界・無意識の世界から掘り起し、意識化しようと意図していたものである、と考える。

（1）柳田国男『故郷七十年』のじぎく文庫、昭和三四年、二六頁。
（2）同（朝日新聞社版）、二四五―六頁。
（3）柳田『青年と学問』『定本柳田国男集、第二五巻』所収、八八頁。
（4）同、一八二頁。
（5）柳田『郷土生活の研究法』『定本柳田国男集、第二五巻』所収、三二五―八頁。

(6) 柳田『青年と学問』『定本柳田国男集、第二五巻』、二四七頁。
(7) 『定本柳田国男集、第二五巻』、三二五頁。
(8) 中井信彦『歴史学的方法の基準』、塙書房、昭和四八年。
(9) 柳田『郷土生活の研究法』『定本柳田国男集、第二五巻』、二八〇頁。
(10) 同、二八三頁。
(11) 柳田『郷土生活の研究』(筑摩書房、昭和四二年)にI郷土生活の研究法(前出)に続いて、II「民俗資料の分類」として収めてあるもの。
(12) 同、二一四頁。
(13) 柳田『雪国の春』、角川文庫、一八頁。
(14) 同、二五頁。
(15) 柳田『明治大正史、世相篇』(『日本の名著・柳田国男』、中央公論社)、二四三頁。
(16) 柳田『郷土生活の研究』(前出(11))、二二八頁。
(17) 同、二三三頁。

六、むすび

以上のように、(一)貧困の近代的再編と階級論として河上肇の「貧乏物語」と高野岩三郎の労働者生活論、(二)社会的勢力説の試みとして高田保馬の社会的勢力論、(四)小家族化と社会生活の不安—戸田貞三の家族社会学的研究、(五)柳田国男の郷土生活研究と「心意現象」論の順で近代日本における社会成層研究の生成を検討してきた。彼等が現実の社会問題にどのように対応し、それらを解明していくために「近代」社会科学の土着化と土着的科学の普遍化をどのように展開しようとしていたのか、そして、特に近代社会における不平等構造化とそこにおける人々の生活をどのように解明していこうとしていたのか、を再考察しようとした。

これらは社会成層論として相互に関連づけられ、あるいは互いの論争の中で、生成展開されてきたのではないが、われわ

れの成層論の分析枠に照らしてその研究史上で近代日本において先駆的にそれがどのように用意されてきたのかを確認したいという意図のもとに検討した。すなわち、社会成層を構造的、動態的に把握していくための諸変数―(a)制度的状況、(b)成層化の基準、(c)資源配分、(d)生活構造、(e)階級形成と階級関係―をとらえていく、基本的視座が、近代日本の社会科学のうちにどのように用意されたのかをみてみようとしたのであつた。大正期、昭和期において本格的に形成されていく新中間層の動態も、基本的には、このように諸変数、分析枠によつて考察していくことが可能である。

しかしながら、ここで検討してきたように近代日本における社会成層研究の生成と展開が大正期及び昭和初期においてその理論的、実証的・総合的な研究が数多く輩出されつつあつたにもかかわらず、昭和終戦前期におけるそれは、恐慌の影響、生活不安、社会不安が増大していく中で提起された諸々の社会問題を解決し得ぬままに、軍部、軍事力の進出をうながすところとなり「国民生活」それ自体が日中戦争、太平洋戦争と戦時体制に組み込まれていくことによつて、本論文で検討したようなそれらの芽を充分に育て上げていくことは困難であつた。戦時下における経済統制、労働統制、更に治安維持や総動員総力体制のもとでの国民の日常生活自体の精神・物資の両面での「時局」への対応を強いられる状況にあつては、研究は受動的な形でしか展開しにくかつたし、その中で国民体位と生活の最低の保護、安定、労働力再生産を如何にして図かるかというぎりぎりのところでしか前進させることが出来なかつた。また、現象を把握する際の「社会型」、「文化型」の強調、文化的、社会的、歴史的文脈での検討の必要という興味深い主張は、しばしば「閉じた体系」論となり易く、「復古主義」に急傾斜していくもろさをも伴いがちであつた。(1)

従つて、本論での検討を通じて要約的に次のような諸点が指摘されるであろう。

(i)ここでとり上げた河上肇、高野岩三郎、米田庄太郎、高田保馬、戸田貞三、柳田国男の諸研究は、いずれも近代日本の中に噴出し告発された社会問題を鋭敏な感覚でとらえ触発されて、それらを解明しようとして「近代」社会科学の土着化を

意欲的に展開したといえる。しかし、大正期にいよいよ実証的、理論的研究が生成展開していくようになるが、特に大学における研究体制が制度化していくようになると社会問題への歴史的現実的な対応と実態から離反し、講壇化していく。むしろ、河上、高野、柳田等は、生涯の後半を大学や官界を去り在野での活動を中心として、労働運動や学問運動に関係していつた。

(ii)確かに(i)で指摘したように、これらの人達によつて「近代」社会科学の土着化が意欲的に試みられ先駆的な役割を果したが、土着的科学の普遍化の作業は、一人柳田を除けば、その作業が意識され深められることは少なかつたのではなかろうか。「近代」社会科学の土着化の作業は研究・実践集団のみでなく、広く知識人、新旧中間層によつて担われると考えられるが、特にこれら知識人、新中間層では多くは近代主義、教養主義、立身出世主義、都市主義等の志向性が強く、社会層としての基盤も弱かつたので、「中間」的勢力ともなり得ず、昭和期に入つて、いよいよ天皇絶対制、家族国家・軍国主義体制が強められる過程で、土着科学の普遍化ではなく、「御尊影」や「二宮金次郎（尊徳）像」のように逆に「近代主義」に対する反動としての固定した復古主義を呼び起さしめることとなつた。そして、この意味で、大正期に芽生えてきた近代日本での「近代」社会科学の土着化と土着科学の普遍化の可能性は、一九三〇年代と戦時体制下の危機状況においては弱められていつたのであり、それらの不徹底が、国際環境と自国の諸条件の変化のもとでの柔軟で、かつ強靱な思想営為を繰り広げていくというよりも、柔軟な「イメージ」「もの」の見方を離れて教義されロゴス化された「近代主義」と「復古主義」の形での固定化と自縛化、政策と運動におけるエリート主義、前衛意識、事大主義を一層強めるように作用したと考える。

(iii)貧困の近代的再編、労働問題、民衆生活の疲弊と不安、といつた近代日本の社会問題への対応、そして欧米の「近代」社会科学の土着化とわが国の土着科学の普遍化の可能性の中から、人々の生活の不平等構造についての研究もその基本的な分析枠がこの期に至つて、明確に浮き彫られつつあつたといえるだろう。特に(i)制度的状況の変化については、河上によつ

て、(ii)資源配分（階級構成）については、河上、高野、高田等によつて、(iii)生活構造については柳田、高野、戸田等によつて、(iv)階級形成と階級関係については河上、高野、柳田等によつて、社会成層研究の方法論、その実証的・理論的な研究が生成展開しつつあつたのである。もちろん、当時においてはこれらの動向は相互に結びつけられないままに各々試みられていつたものであつた。

第二次大戦終戦後は、いきおいマルクス主義か、あるいは機能主義的社会学か、あるいは社会政策論からの接近がなされてきたが、国際的にも国内的にも大きな構造変化と新たな社会問題の出現がみられる今日、不平等構造の研究をめぐつて近代日本において「近代」社会科学の土着化と土着科学の普遍化のさまざまな模索をわれわれがあらためて再考察してみることは充分に意味のある作業であると考える。

（一九七七年三月）

(1) 若宮卯之助「日本社会学の方向」『社会学雑誌』大正一三年、同「日本社会学の意義」『社会学雑誌』大正一五年一一月、同「日本社会学の意義（再論）『社会学雑誌』大正一五年一二月、和辻哲郎『風土—人間学的考察—』岩波書店、昭和一〇年、高山岩男『文化類型学』（昭和一四年『日本民族の心』玉川大学出版部、昭和四七年に再収録）。